倉橋惣三先生著
子供讃歌より

彼の保育理論を育てた関西保育会

神戸——望月くに女史

武庫山を背にした斜面の港町の八月に、明るい日光と海からの涼風にめぐまれて、さわやかである。神戸幼稚園の広い部屋の硝子窓が、いつぱいにあけはなれて、中央の大テーブルには、籠に盛られた新鮮ないろいろの果物とサイダーの泡のたつ幾つかのコップが置かれてあり、白いテーブルクロースを、窓からの風が、ひらひらとさせている。

「お暑かつたでしよう」

「ここは大そう涼しいですね。それに神戸は空気が晴ればれしていて、気持ちがいいですね。さつき、停車場からここへつれてきていただいた途中でも、坂道から振りかえつてみる、港の景色がすつかり気に入りました」

「おんなじ暑くても、東京より空気が、むしむししないのがいいようです。—香櫨園の講習では、どんお話でしたの」

「新日曜学校論というので、勝手な自由な話をさせて貰いました」

彼が、そういつてサイダーに唇をぬらすとテーブルのむこうの望月さんが、つめたく冷したバナナを、銀のナイフで切つて、ガラスの皿においてくれた。そうして、女史独得のキビキビした調子で、

「ここでも新幼稚園論を勝手に自由にお話をして下さいませんか。来年ここで、京阪神三市連合保育会の大会を開きますから」

といつて、若い人たちをかえりみて、

「ねえ。そう願いましようね。わたしたちは新しいお話に餓えてるのね」

といつた。もともと関西の生れで、東京女高師の第一回の卒業生である望月さんは、歯切れのいい東京弁である。それが、滑かな関西弁で話す若い保母さんたちのなかで、一層元気よくきこえる。

望月さんとは、手紙の往復はあつたが、会うのはこの日がはじめてであつた。彼が、阪神香櫨園の日曜学校教師講習に招かれてきた機会、わざわざ迎えられて望月さんの幼稚園へ来たのである。

その時の約束にもとづいて、翌年の春、彼は、三市連合会の総会で、「保育の新しい目標」と題して、長い講演をした。

……中　略……

望月さんは、会員席の最前列にいて、彼の活動心理学や、神経発達論等の学問的な論述の中に、若い気焔のまじる話を、熱心にきいていてくれたが、講演がすむと控室にいつしよにきて、やにわに握手してくれた。そのころ勢のいい望月さんは、よく握手する人であつた。